

熟柿庵たより



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和七年重十月 第百四十一号

ようやく秋の気配になつてきました。そして氣分も少し和らいでまいりました。数年ぶりに脂ののつたサンマを見つけ塩焼きにして、山盛りの大根おろしを添えて冷酒で一杯やりました。今年の過酷な暑さをなんとか乗り切れたことへのささやかなご褒美でしょうか。

二つの人生の見方

人生には二つの見方があります。恩師だつた武田寛弘先生は。『歎異抄講義録』たんにじょうの冒頭で、次のように述べておられます。

「人の生き方というものを考えてみると、二つの見方があります。一つは生きているという事実、生きているということは、本当は自分じや全然わかつていないので。もう一つは、生まれてきてそして次々といろいろなことが頭の中に入ってきて知識としていろいろなことを覚えて、私はこういう者だと考えられる自分という者です。

ふつう私たちは自分で考え、次から次へといろいろなことを勉強し、さらにそれを経験し学んで、それが自分であると思つてゐるわけです。他人とはちがつて自分はこういう個性をもつた人間ですと言つてゐる。それが私という者のすべてだと考へてゐる見方です。これが二つめの見方です。しかし、その自分というのは意識のなかで作られた自分で。私の命が生まれてきたというけれど、それは自分の意識とは全然関係のことなんです。

意識というのは、私が生まれた後から出てきたもので。生まれたきたそのこと 자체は自分の意識では測り知ることができないんです。さらに、たつた今生きているということも自分の意識とは全然別なんです。

生きているということは、自分で考へていないので心臓は動くし、自分で考へてもいないので呼吸もするし、悪い菌が体に入ればちゃんと排除してくれる。自然に命を保つてゐるという事実は、私たちの意識とは別なんです。この根っこで命を保つてゐるものと意識で分別してゐる「私」というもの、この二つをひつくるめて私と言つてゐるわけです。

しかし普段「私」と言つてゐる時には、この根っこで命を保つてゐるものについてはほとんど考へてはいません。自分の論理・理屈が我執となつて、それを元にして「私」と言つてゐるだけなのです。しかし根っここのこの命はそんちつけなものではありません。無限の命なんです。地球始まつて以来、宇宙始まつて

以来の無限の彼方から一つの大きな法としてある命なんです。

その命を今私たちは生きているわけですが、でも現実に私たちが生きていると考へてゐるのは有限の世界ですよね。生まれてきたその後から始まつた意識にしたがつて分別し、自分の好みにあわせて善悪、好き嫌いを決めていく。そういう人間の分別の世界に生きているわけです。ところが生きている本体は、無限の道理のなかに生きているのです。そこにどうしようもないギヤップが出てきます。

少し長い引用でしたが、先生の仏教に対する捉え方がうかがえます。
この二つの命のありようを、少し乱暴ですが、「無我」の命と「自我」の命と言ひ換えてみます。

「無我」の命

自分の考えをはずして、言わば仏様の目で世界を見ると、まず全ての命は「平等」なのです。人間の命も動物の命も同じなのです。動物や野菜の命を食べることとは本当はとても残酷なことです。また「時間」についても、私たちは普段に、時間は過去、現在、未来と流れていると思い込んでいますが、これも「無我」の世界では、而今（にこん、酒の銘柄ではありません）、たつた今しかないのだ、と説いています。また「無分別」と言うことも語っています。私たちには例えば「山は山、川は川」「彼は彼、私は私」と分別していますが、本当はそんな区別は存在しません。聖徳太子はそのことを「世間はすべて嘘っぱち」と語つておられます。

私は、仏教をとおして、私の思いをはるかに超えたこの「無我」の世界を学んできたのですが、少々疲れてきました。自分の限られた考えで無限の世界を理解しようとしてきたのですから、まるでずっと背伸びしているようで、疲れます。

「自我」の命

いくら妄想だと言われても、「無我」の世界が眞実だと言われても、それを考へてゐるのはこの私のですから、私が生きているという思いは、認知症でない限り死ぬまで消えません。世界を見ているのはこの私なのだし、努力して人生を送つているのも私なのです。病気になるのは嫌だし、健康であることを願つているのも私なのです。眠つている時以外、常に私を中心にして物事を考へているのです。そして私の人生が幸福であることを願つて常に生きているのです。願つていながら、どうしようもない理不尽な出来事が次から次へと起こつてくるこの人生。先生はそれを「ギヤップ」とおつしやっています。

無我と自我

この「無我」の眞実の世界を、「自我」を生きている私がどんなふうに受け止めればよいのかを考へております。親鸞聖人は「自我」の私を「罪惡深重、煩惱熾盛」と言つて、罪深く欲深いどうしようもない存在であると語つておられます。

昔、ある女性にこの言葉を話したら、「厳しすぎる反省で、自殺したくなりそう」と言つておられました。私の説明が足りませんでした。

今、私はこの「無我」の世界を、面と向かい合つて対峙するのではなく、背中で風を感じるように、受け止めて生きていければ良いのかなと思つております。

伊与田兼明さん追悼

九月半ば。江戸川区の正見寺住職、伊与田兼明さんが還淨（げんじょう）されました。享年七十九。追悼できるほどには、まだ心は冷静ではありませんが、思い出すままに彼について語ります。

彼とは、武田寛弘先生を通じて「求道会」で知りました。「求道会」は、昭和前期を、漂泊の詩人として生きられた星野清蔵氏のお弟子さんたちが作られた、歴史ある会です。私にとつても、五十年以上のご縁を頂いたこの上ない大切な会でした。

勉強会では、曾我量深氏や『大乗起信論』『成唯識論』などをテキストに学んでまいりました。

当時の私は若きゆえの浅学もあつて、ただ仏教の言葉が、小さな夜空の星くずのように意味なく散らばつてゐるだけでした。しかし会を重ねるにしたがつて、その星くずが一つ一つ次第につながれていくて、自分なりの星座が作られるようになっていき、それがとても喜びでもありました。「求道会」はそんなふうに私の生きる支えになつてくれました。勉強会の後の呑み会も含めて、かけがえのない時間でした。そして、その会にはいつもこやかな伊与田さんがおられました。

私は今も枕元にラジカセを置いて、「古今亭しん生」の落語を子守歌がわりに聞いております。これは二十代の頃、伊与田さん宅に泊めていただきたとき、枕を並べて聴かせて頂いたしん生さんの落語のお陰です。一人してニヤニヤして聞きながら眠りついたことが今も忘れられません。

武田寛弘先生は、生前、「いくら仏教の勉強をしても、温かい心をもつてないと、意味がないのですよ」とおっしゃっていました。先生は、温かい心をもつた人としてきっと伊与田さんことを思つておられたのだろうと確信しております。

かなしみの季節

仏教には「四苦八苦」という言葉があつて、その中の一つに「愛別離苦」（愛する人と別れるという苦しみ）があります。長年親しくご縁をいただいて、そして別れの時がくる。それはまるで心の半分が解け落ちるような辛い気持ちです。そうしたことがここ数年増えてきました。人生の別れの季節の真つただ中を生きているのかもしません。とても辛いことですが、これも人生の中の大切な季節です。長く生きていれば味わな

ければならない大切な季節です。

伊与田さん、ありがとうございました。

【 お知らせ 】

築地本願寺での合同法要の件案内

十一月二十二日（土曜日）昼十二時から、築地本願寺の「東日本間」にて合同法要を行います。ご縁ある方のお参りをお待ち申し上げます。

集合場所は、いつものように築地本願寺本堂内の右わきです。
なお、年度当初にお便りにてご案内いたしました日時、「十一月六日正午」は
変更になりましたのでご留意ください。

今月のことば

生きるとは 悲しみを生きぬくこと

そして

悲しみは生きるからになります

熟柿庵 東京都荒川区東日暮里五ー九ー四

電話 03ー1ー五六〇四一ーーーーー四

ホームページ <http://www.jyukushian.com>